様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４５１６
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１３０８７

研究課題名（和文）芸術系大学から仕事への移行に関する社会学的研究

研究課題名（英文）A Sociological Study on Transition from Arts University to Work

研究代表者
喜始　照宣（Kishi, Akinori）

園田学園女子大学・経営学部・准教授

研究者番号：４０７９８９２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、芸術系大学出身者の初期キャリアについて検討した。具体的には、芸術系大学卒業生へのインタビュー調査をもとに、1)かれらの卒業後の仕事・生活と大学時代に得た諸資源(資本)との関連性、2)かれらが芸術系大学という場やそこでの教育に与える意味(レリバンス)に着目した分析を行った。その結果、a)芸術活動を行う上で、大学時代に得た文化資本や社会関係資本が活用されること、b)芸術関連の教育職への従事が、芸術活動のための経済資本獲得や芸術家としての省察の機会をもたらすこと、c)大学での教育や経験に対して、卒業生は職業的な面だけでなく、多様な面、特に主体化の面で意味を見出していることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の意義は以下の点にある。1)芸術系大学卒業生の初期キャリア、特に芸術活動の継続について、その現状や過程を具体的に提示した点である。これは、芸術キャリア継続が可能となる社会的過程の解明に資する成果であり、芸術家支援に関する施策を検討するための基礎資料になると考える。2)大学教育のレリバンスの観点から、芸術系大学での教育や諸経験が卒業生の人生にどのような意味を持つのかについて、職業的な面だけでなく市民的・主体化的な面も含め、多角的に検討した点である。これは、芸術系大学という場の社会的役割を理論化する上で有益な知見であり、大学教育のレリバンス研究に新たな視座を提供するものと考える。

研究成果の概要（英文）：This study examines the early careers of university graduates of the arts. Specifically, using data from interviews with university graduates of the arts, I conducted qualitative analysis focusing on 1) the relationship between their post-graduation work and life and the resources they acquired during their university years, and 2) the meanings they give to the place of arts universities and the education they experienced there. The results revealed the following points: a) graduates use the cultural and social capital they acquired during their university years in their artistic activities after graduation; b) working in arts-related education provides opportunities to acquire economic capital for their artistic activities and to reflect on themselves as artists; and c) the graduates give meanings for their university education and experiences not only in occupational aspects, but also in various other aspects, especially in terms of subjectification.

研究分野：教育社会学

キーワード：芸術系大学　大学から仕事への移行　芸術キャリア　インタビュー　芸術労働市場　キャリア形成　ライフヒストリー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、日本において、「芸術と社会の関係性」に関する議論が芸術生産の実践者だけではなく、研究者の間でも盛んになっている。国内の芸術文化政策、芸術家支援の制度整備には課題が多いのが現状であるが、芸術分野の労働問題に注目が集まってきており、様々な団体・研究者による実態調査・問題提起がなされている。

しかし、国内の研究の多くは、芸術家を含む芸術生産者の属性や職業規範、所得、労働環境等の基礎的な実態把握が主である。そのため、かれらがどのような背景のもと芸術労働市場へと参入したのか（リクルートメントの問題）、また参入以前の段階での教育・訓練と仕事との接続関係はどのようになっているのか（学校から仕事への移行の問題）については十分な検討がなされていない。つまり、国内の芸術生産者の研究は「教育」への視点を欠いている。

こうした学術的背景のもと、研究代表者（以下、筆者とする）はこれまで、美術系大学・学部の学生を対象に、上記のリクルートメントの問題に教育社会学的な観点から取り組んできた。その成果として、美術系大学は学生にとって重要なコミュニティ、特に制作活動のための場として機能しており、学生の意識・行動、進路選択は、大学における実技重視の教育体制の影響を受けながら形成されていくことが見出された。それだけでなく、美術系大学の教育体制は、大学入学前段階での教育、特に予備校・画塾との実質的な接続関係を前提に成立しており、予備校・画塾は学生が制作活動を展開していく上で有用な文化的資源を提供する場となっていることも明らかになった。詳しくは、喜始（2022a）を参照のこと。

このように、筆者は、美術系大学・学部の学生を対象に、芸術生産者（予備軍）のリクルートメントの問題を扱ってきた。また、音楽系大学・学部の学生・卒業者へも同様の問題関心からインタビュー調査をこれまで実施してきた（成果の一部として、喜始（2022b）がある）。しかし、もう一つの重要な論点である、芸術系大学から仕事への移行問題についても研究を進展させる必要がある。

２．研究の目的

そこで、本研究では、次の「問い」（Research Questions）を設定し、それらに応えることで、日本における芸術系大学から仕事への移行の現状とその過程の解明を試みた。そして、そのために、芸術系大学・学部の卒業生に対するインタビュー調査を実施した。

問 1：芸術系大学・学部出身者は、大学卒業後にどのようなキャリアやライフコースを形成しているのか

問 2：芸術分野の仕事への継続的な関与やそこからの離脱はどのような要因（家庭や学校で獲得した資源等）によって生じているのか

さらに、調査研究を進める過程で、問 2 から派生した「芸術分野における教育のレリバンス」に関する下記の問いも追加された。卒業生の芸術労働市場での活躍に大学での教育経験がどのような影響を与えているのか、教育の職業的意義（レリバンス）の観点からの研究はほとんどなされていないが、卒業生の仕事・生活上における大学教育のレリバンスについて検討することは、本研究の目的を遂行する上で不可欠な論点であると考えたからである。

問 3：芸術系大学・学部出身者は、卒業後の仕事・生活において、大学時代のどのような事柄に、どのような意味を見出しているのか

３．研究の方法

本研究では、おもに芸術系大学卒業生を対象としたインタビュー調査をもとに、上記の問い（RQs）への回答を試みた。それと同時に、芸術分野における大学教育とキャリア形成に関する論点整理、および本研究における戦略的視点の設定を行うために、「芸術と教育」、「大学から仕事への移行」、「教育のレリバンス」、「芸術キャリアと芸術労働市場」等の研究テーマに関連する人文・社会科学領域（特に社会学、教育学、文化人類学、哲学、経済学）の先行研究を幅広くレビューした。

インタビュー調査は、2018 年 8 月から 2020 年 1 月（第 1 期）、および 2022 年 2 月から 2023 年 3 月（第 2 期）の 2 期に分けて実施された。第 1 期では筆者の知人に協力を依頼し、対面での調査実施を基本とした。第 2 期のインタビュー方法については、対面、オンライン、メールの 3 つの中から、調査協力者の方に選択してもらった。また、それらの方法での実施が難しい場合は、自記式アンケートで代用した。

対面あるいはオンラインでのインタビュー形式は、フォーマルな状況での半構造化法である。

また、データの取扱い等について事前に説明を行い、許可を得た上で、調査時の会話を IC レコーダーで録音し、その音源をもとに逐語記録を作成した。メールや自記式アンケートの場合も、対面あるいはオンラインと同様の質問項目を中心に回答してもらった。

最終的な調査協力者は 41 名（短大卒 2 名含む）である。出身大学（学部）での専攻分野の内訳は、美術系（絵画・彫刻等）16 名、工芸系 4 名、デザイン系 5 名、芸術学系 3 名、音楽系 6 名、その他（映像・メディア表現等）7 名となっている。また、協力者には幅広い世代が含まれており、大学（学部）卒業年は 1995 年から 2020 年である。

なお、調査時期を 2 期に分け、調査方法を変更した理由は以下の通りである。まず、研究開始当初は、対面でのインタビュー調査の実施のみを予定していた。しかし、筆者の所属機関の変更およびそれに伴う居住地域の移動、そして新型コロナウイルス感染症拡大の影響等によって、調査の実施方法を変更するに至った。具体的には、2019 年度以降は、調査協力者の同意が得られた場合のみ、感染症防止対策を徹底した上で対面でのインタビューを実施したが、それ以外の場合は主にオンラインかメールを用いたインタビュー方法を導入した。また、調査協力者の募集に関しても、筆者が過去に実施した調査の協力者だけでなく、SNS を通じて、新規の協力者を募った。

そのため、研究開始当初に掲げていた「2009～2012 年度実施の過去調査における協力者(80 名以上)への追跡調査の実施」という目標は達成できなかったが、インタビュー方法の選択肢を増やし、新たな募集を行った結果として、様々な地域・世代、専攻分野の方々からの協力を得ることができた。多様な層の卒業生の語りに触れることで、研究開始当初よりも、データ分析における解釈の幅が広がり、研究成果の産出過程において新たな発想や視点を得ることができたと考える。

４．研究成果

既述の 3 つの問いに回答を与えるべく、芸術系大学卒業生へのインタビュー調査をもとに、1)かれらの卒業後の仕事・生活と大学時代に得た諸資源(資本)との関連性、2)かれらが芸術系大学という場やそこでの教育に与える意味(レリバンス)に着目した分析を行った。その結果、明らかになったことは以下の通りである。

なお、上記のように調査協力者の専攻分野には偏りがあるため、全ての語りのデータを踏まえた上で、美術系、工芸系を中心に分析を行った。それゆえ、以下では、美術系大学とその卒業生を念頭に置いた記述とした。

(1) 卒業後の仕事・生活と大学時代に得た諸資源(資本)との関連性

まず、美術系大学・学部の卒業生は、美術・デザイン関連職を中心に、雇用形態や職種の点で多様な仕事に従事しているが、美大といった美術教育領域を通じて得た諸資本を転換・活用しながら、学卒後の初期キャリアを歩んでいることが明らかになった。その一方、卒業後も（専業あるいは他の仕事と並行して）作家として作品を制作し定期的に発表を行っている者（以下、作家活動継続者とする）は少数である可能性が示された。

他方で、作家活動継続者たちは、制作を継続するための資金や時間の確保が可能な仕事を自らの状況に合わせて選び取っていた。かれらは、美大を経て身体化された文化資本をもとに作品を制作し、制作主義的な論理――制作を継続できるか否か――によって、仕事の選択や生活の組織化を行う傾向があると言える。特に学校教育や専門学校、絵画教室、予備校の講師等、芸術分野の教育職に従事している者が作家活動継続者のうちに多く見られた。こうした芸術分野の教育職への従事は、作家活動のための経済資本だけでなく、作家としての省察の機会をもたらす可能性も見出された。さらに、作家活動継続者たちは、同窓の制作者ネットワークを基盤とする社会関係資本を活用することで制作場所や発表機会を確保していた。

ただし、美大で獲得した文化資本・社会関係資本の活用・転換の限界性も同時に示唆された。すなわち、美大で獲得した文化資本と仕事で要求されるそれとのミスマッチ、消費者に繋がるための制作者ネットワークを超えた関係構築の必要性である。

(2) 芸術系大学という場やそこでの教育に与える意味(レリバンス)

芸術分野における大学教育のレリバンスについては、職業的な面だけではなく、その他多様な面からの検討を行った。なぜなら、大学教育の仕事で「役立つ」側面の抽出からさらに進んで、各専攻分野の教育の特色を踏まえつつ、（特に個々人の人生における）教育と仕事との関係構造とそのバリエーションを多様な視点から検討し描き出すことの必要性が、先行研究の検討から見出されたからである。

まず、職業的レリバンスについて。美術に関連する仕事に就いている者は、大学や予備校を通じて獲得したデッサン等のスキルや作家的なものの見方・考え方等を現在の仕事や作家活動において有用なものと考えていた。また、そうした諸要素は、在学時の制作行為それ自体や、アトリエや講評会での他者との相互作用等、大学で展開される教育実践全体を通じて学ばれたことが前景化して語られた。デザイナーとして働いている場合や美術と直接関連しない仕事に就いている場合でも、大学教育を通じて得た様々な経験や能力に対する職業的な意義が語られた。かれらが語る職業的レリバンスの程度・内容は、個々人の卒業後の仕事・生活状況や学生時代の大

学への関与の度合い、そして人生における制作活動の重要性等によって左右されるものであると推測される。

しかし、在学中に、実技面に関する知識・スキルを深める機会は豊富にある一方、非就職者的な生活方法、つまり作家・フリーランスとして必要となる実務的な知識・スキルを学ぶ機会が少ないことが大学教育の課題として挙げられた。これは作家・フリーランスとして生きる上での市民的レリバンス（＝市民として生きる上での道具）の希薄さという意味の表れであると解釈できる。

他方で、美術に関連する仕事に就いているか否かにかかわらず、美術史や芸術論、古典技法等を教養として学べたことに即自的レリバンス（＝「面白さ」の実感）が、そして何よりも、表現行為の追求により自らの美術との生き方を模索できたことに大学教育の意味が見出されていた。特に後者の経験[表現行為の追求により自らの美術との生き方を模索できたこと]は、卒業後（将来）の美術との関わり方にも影響を及ぼしていた。これは、「面白さ」の実感としての即自的レリバンスとは区別して、漸次的に構築される「主体化的レリバンス」（＝世界における存在のあり方の獲得）として捉えうるものである。

以上の結果から、美術分野における大学教育とその卒業生の仕事・生活とのレリバンスの特徴を描出するためには、職業的レリバンスに限定されない多面的な観点からの分析が必要であることが示唆された。特に「芸術すること（doing art）」は、人びとの主体性の出現を支える営みであるがゆえに（Biesta 2017）、芸術分野における大学教育のレリバンスを捉える上では、過去-現在-未来を通じて生起する主体化を基盤として、教育のレリバンスが人びとの仕事・生活上に発現することへの着眼、つまり「主体化的レリバンス」の視点の導入が重要である点が提起された。こうした視点の妥当性および他分野への応用可能性の検討については今後の課題としたい。

＜引用文献＞

① 喜始 照宣、芸術する人びとをつくる：美大生の社会学、晃洋書房、2022 年
② 喜始 照宣、音楽系大学の学生と「大学」の意味：学生・卒業生への聞き取り調査をもとに、園田学園女子大学論文集、第 56 号、2022 年、1-19
③ Gert Biesta、Letting Art Teach：Art Education ‘After' Joseph Beuys、ArtEZ Press、2017 年

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 喜始　照宣	４．巻 476
２．論文標題 美大の教育は何をもたらすか	５．発行年 2023年
３．雑誌名 美術の窓 2023年5月号	６．最初と最後の頁 8-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 喜始　照宣	４．巻 56
２．論文標題 音楽系大学の学生と「大学」の意味――学生・卒業生への聞き取り調査をもとに	５．発行年 2022年
３．雑誌名 園田学園女子大学論文集	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 喜始　照宣	４．巻 －
２．論文標題 音楽家のエコシステムをどう捉えるか	５．発行年 2022年
３．雑誌名 外典 大霊廟Ⅲ（「KAC Performing Arts Program 2021 / music 安野太郎 ゾンビ音楽 『大霊廟Ⅲ』――サークル・オブ・ライフ」公式パンフレット）	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 喜始　照宣	４．巻 53
２．論文標題 美術系高校・大学への進路はどのように選択されるのか――大学生への質的・量的調査をもとに	５．発行年 2019年
３．雑誌名 園田学園女子大学論文集	６．最初と最後の頁 41-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 喜始　照宣	4．巻 71(1074)
2．論文標題 データから読み解く美大生の「キャリア形成」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 美術手帖 2019年2月号	6．最初と最後の頁 84-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 喜始　照宣	4．巻 24
2．論文標題 だれが美術系大学に進学したのか――学生の子ども時代の美術活動・経験に着目して	5．発行年 2018年
3．雑誌名 子ども社会研究	6．最初と最後の頁 151-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 喜始　照宣
2．発表標題 芸術分野における初期キャリアと大学教育のレリバンス――美術系大学卒業生への聞き取り調査をもとに
3．学会等名 日本教育社会学会
4．発表年 2023年

1．発表者名 喜始照宣
2．発表標題 美術系大学卒業生の初期キャリアと美術教育の役割――2時点の聞き取りデータをもとに
3．学会等名 日本教育社会学会
4．発表年 2020年

１．発表者名 喜始照宣
２．発表標題 美術系大学における教育体制と学生の大学生活・意識のジェンダー差
３．学会等名 日本文化政策学会第13回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 喜始　照宣
２．発表標題 音楽系大学における学生の大学教育観――学生・卒業生への聞き取り調査をもとに
３．学会等名 日本教育社会学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 喜始　照宣	４．発行年 2022年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 256
３．書名 芸術する人びとをつくる――美大生の社会学	

１．著者名 中村 高康　編	４．発行年 2020年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 362
３．書名 大学入試がわかる本（執筆範囲：「美大（芸術系大学）の受験」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関